

## 「三宝通信」法話

浄土宗 天上山 大念寺  
住職 大島祥明



### 成仏するんでしょうか？

「成仏するんでしょうか？」その一言が心に深く突き刺さりました。

幼い子どもを二人遺して病死した妻に心残りがあつて成仏できないのではないかと心配した夫からの質問でした。私が三十六歳の夏のことでした。それからというもの、葬儀では心を研ぎ澄まして「なんとか故人の心・気持ちをくみとれないものか」と必死でした。

やがて少しずつ少しずつ、「なにか」を感じとれるようになってきました。

それは三年後の三百二十二件目の葬儀でのことです。転落事故で即死をされた方の葬儀でしたが、ご遺体は目の前にあるのにまったく故人を感じないのです。即死であったため、本人が自分の死に気がつかず、魂はまだ現場に残っていたのです。

そして、次の葬儀が私に衝撃を与え、霊の解明となったのです。それは七百八十九件目の方でした。実際の年齢と私を感じとれる本人の年齢が異なっていたのです。私が四十一歳のときでした。

それからは無我夢中でした。葬家に失礼とは思いましたが、「今日はどんな故人の方とお会いできるのか」と、葬儀に行くことが楽しみになっていきました。毎日が葬儀に通夜という日々でしたので、体力的にも精神的にもきつくて、もうやめようかと思つたこともありました。

けれども、私の実感した故人の魂を客観的なデータとして、残しておきたいと思ひました。私の主観的な思いこみではなくて、客観的なデータとして信憑性をもたせるためには、二千件のデータが必要とのこと。もしもこのまま、葬儀をやりつづけて死ぬようなことがあれば、それも本望だと思ひました。

●大島祥明住職著『死んだらおしまい、ではなかった』(PHP研究所刊)より抜粋。同著の問い合わせ先  
03-32239-6257 (PHP研究所ビジネス出版部)